



こども、おとなの
スピリチュアリティに
働きかける

～コロナ後のYキャンプ～

岩坂 二規

Iwasaka Niki

関西学院大学教育学部准教授
大阪YMCA会長
日本YMCA同盟常議員・評議員

▼YMCAキャンプとの出会いは、リーダーという存在との出会い

小学校1年生の時に参加した六甲山YMCAでの1泊2日のキャンプがYMCAキャンプとの出会いでした。父がYMCAの職員だったので、幼いころから地元の奈良YMCAのスポーツクラスなどに参加し、いつも赤い三角のマークの入ったグッズに囲まれていたので、YMCAは身近な存在でした。食が細かったその頃の私にとって、キャンプ中の食事が一番の心配事でした。私のグループのリーダーは、お説教したり食べるのを急がせたりせずに、ゆっくり様子を見ながら嫌いなものを食べる方法を教えてくれたり、1つのおかずでも全部食べられたらいっしょに喜んでくれたりして、上手にフォローしてくれました。不安が自信に変わり、初めてのキャンプは安心と楽しさで満ちた思い出となりました。YMCAキャンプの中で、子どもにとってボランティアリーダーは本当に大きな存在だと思います。先生でも親でもきょうだいとも異なる「親しみのある大人」という特別な存在であり、リーダーたち自身がイキイキと自由にキャンプを楽しみ、自分を表現していました。それは、子どもだった私にとって色んな事ができるヒーローのような存在でした。「リーダーという存在」に表されるYMCAキャンプの特徴と構造が、子どもの不安に寄り添い、本来の子どもの有り様を引き出していたのだと思います。

▼居場所としてのキャンプ

子どもは、日常生活や学校生活の中で、本来しなければならない多くの事に取り囲まれて過ごしていますが、それをはみ出す根源的な力を持っています。つまり、非日常を楽しむ能力に満ち溢れていると言っても良いでしょう。学校でもない、家庭でもない教育の場としてのキャンプは、大人であるリーダーにとってもイキイキと楽しめる居場所でもあります。大人がイキイキとキャンプを楽しむ姿に触れることで、子どもたちは安心して本来の豊かな力を呼び出すことができるのだと思います。



リーダー自身も、学校に戻れば就職活動や勉学で苦勞していたり、プライベートでは恋愛に悩んだり忙しいですが、キャンプに来て自然の中でほんとうの自分を発見し、仲間や子どもたちの前でそれを開示し自己解放できる時、キャンプが自分にとっての大切な居場所となります。昔からキャンプはそういう場所として機能してきたのだと思います。単線的な生き方ではなく、複線的な生き方をオープンにできる場所だからこそ、キャンプに関わる全ての人が安心して本来の自分の力を思いきり発揮できるのではないのでしょうか。



《ワールドキャンプの様子 アメリカ、ミネソタにて /1985年》

▼これからのY M C Aキャンプ ～NEXT100CAMP に向けて～

私たちはキャンプ 100 年に際して、「次の 100 年に向けたキャンプ」とは何かについてこれまでも考えてきましたが、このコロナショックによってその捉え方も変わるべきだと思います。もちろんそれは、変えてはいけなものを私たちが見極め共有することの価値がより高まるということでもあります。現実的にどうキャンプを考えていくか、そこで見失ってはならないキャンプの本質は何かということ、コロナ後の世界だからこそ共に磨いていくということです。

私は若いころに北米Y M C Aの大自然の中でのキャンプを世界中の仲間と共に経験しました。また、教育研究者として、東南アジアのY M C Aが実施するワークキャンプや、イギリスのY M C Aやスカウトのコースワークの現場に関わりました。

そのような、Y M C Aが世界中で創り出してきた様々なキャンプを経験した人たちが、キャンプの多様性とともにそこに変わらぬものとして通底するキャンプの本質を証言し、いっしょに考えることによって、コロナ後の世界でY M C Aが行うキャンプのカタチが見えてくることを願っています。これからのY M C Aキャンプは、グループワークを基本とした組織キャンプをハブとして保ちながら、そこからねらい・方法・実践・参加形態などが多様で自由に派生できる柔軟なものへ解放していくべきだと思います。同時に、「Y M C Aキャンプの本質」として受け継がれてきたもの、そしてコロナ後の世界でさらに価値が高まり磨かれるべきものとして、子どもも大人もキャンプの体験によって「スピリチュアリティ」に触れることの重要性を挙げたいと思います。

自然を通して、目に見えないもの、不思議なもの、人を越えた存在からメッセージを受け取り、人と人がつながり関係づくこと。キャンプファイアーの火を、夜空のきらめく星々を、草むらの香りを、虫



《タイ北部山岳少数民族の村でのワークキャンプ /2008 年》

たちや誰かわからないものの声を、雲のカタチと行方を、波しぶきの冷たさを、自らの感覚の世界に受け入れ、自分がそこにいい存在として、この世界に愛されるものとして、生きる意味が与えられるとき、子どもたち・大人たちの霊性（スピリチュアリティ）が息づき、自然と人を友として祈る力が育まれます。

それは、仲間やリーダーの存在と計画され準備されたプログラムによって、共同的な関係性の中で生き生きとしたストーリーとなって、その後のキャンパーの人生を支えます。

コロナウィルスは人工的に造られたものではなく、自然から生じたものです。なぜコロナが発生し、このような状況になったのか、誰にも分かりません。そこには自然を超えたもの、目に見えない不思議な力が確かに存在します。コロナショックの中で悲しいこと、苦しいこと、不便なことがたくさんありますが、日常から切り離された時間の中で、「本当の自分の在り方」に向き合う時間が生まれています。この時間を一過性のものでなく、自己と他者の存在と出会い直し、この世界でどのように生きるかを問い続けていく習慣に変えていくこと、そのための学びと育ちの場がキャンプであり、その願いを共有しながら取り組むのがY M C A キャンプなのではないでしょうか。



《タイ北部山岳少数民族の村でのワークキャンプ /2008 年》



Profile

1968 年奈良生まれ。

幼少時から Y M C A のプログラムに参加。高校生の際に参加した北米 Y M C A キャンプ 100 周年記念事業「ワールドキャンプ」が、その後の学びと働きの原点となる。大学教員の傍ら、Y M C A での会員活動とともに学生 Y M C A 顧問としてユース育成に関わる。

【取材：大阪 Y M C A 小西雄希】